

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

茅の輪潜る縁もゆかりもない町の 斉藤久美子

たまたま通つた町。知らない町。神社があり茅の輪があった。そうか：夏越の大祓いかと、思い立って茅の輪を8の字に回り異界に入つてみた。縁もゆかりもない、通り過ぎるだけの町だが、偶然にくぐつた大きな茅の輪には何か大きなパワーがあり、彷徨つている今の自分の心に一筋の光明が点つたような気がする。「ゆかりもない町の」の終り方から、そう感じた。

汗かいて風呂場の掃除また瘦せる 佐藤 和子

家庭の風呂場。手を抜くと儼だらけになるので作者は浴槽から壁、天井、蛇口、桶、椅子に至るまで丹念に掃除する。汗も出ようというものだ。「また瘦せる」に働きの正直な気持ち述べられている。

団子売る番の匂ひ五月闇 島 昌子

昼なお暗い五月雨の頃。神社に近い団子屋などから醬油の風味よい匂いが闇をくぐつて鼻に至る。いい匂い。猫も植木を飛び越えて団子屋へ。予約し参詣が終つてか

らその団子を受け取る人もいる。勿論、その場で戴く御仁もいよう。梅雨どきは醬油だれの焼き団子が一番。

青鷺の小雨に打たれるたりけり 清水 悠太

水に脚を突つ込んだまま動かない青鷺を想う。翡翠が水面に飛んで来ても動じぬ青鷺を見たことがある。表情ひとつ変えない。この句の青鷺もそのようだ。雨がしとしと落ちてきても打たれたまま。「小雨に打たれるたりけり」の一点に表現を集中し、一句が格調高く響く。

炎ゆる地につくと立ちて足じゃんけん 首藤 久枝

じゃんけんにはいろいろの遊び方があつて、足じゃんけんは足でグー・チョキ・パーを表現。この句では、炎熱の地に立ち、やおらじゃんけんをする。砂ぼこりが立てばエンリオ・モリコーネの音楽が流れる西部劇の決闘場面のようである。「すつくと立ち」が格好いい。

青山椒盗み来て妻喜ばす 新海あぐり

香りの高い小粒の青山椒を見つけ、それを摘んで来たという。その罪の自覚が「盗み来て」。でも、家では大歓迎され妻をたいそう喜ばした。私の弟は小さい時によその農家の茄子を取つてきて農家の指名手配を受けたことがあるが、青山椒なら誰も何とも言わないだろう。

手術して死ぬかも知れぬ雲の峰 菅原 淑子

MRI検査を経てこの夏に手術を受けた作者。手術を待つ間の長かったこと、そして手術が上手くいくかどうかの心配。その不安な気持ちを表わしたのが「手術して死ぬかも知れぬ」。幸い、無事に退院され句会も再開されていると聞く。雲の峰からパワーを戴いたのだろう。

あんころに箸付け試食盆用意 杉淵真喜子

あんころ餅。あんこ餅とも言ふ。彼岸の餅や盆餅として家庭で作られることが多い。もち粉、粒あん、砂糖、薄力粉、水。よくこねて少し小さめに作る。この句では、お供え用に作ったあんころを試食、つまり味見をしている。それぞれの家にはそれぞれの味がある。「箸付け」がその情景をよく伝えていていると思う。

風吹けば風むらさきにラベンダー 鈴木 智子

古代ローマでは浴用剤として疲労回復に用いられたラベンダー。群生して咲くと紫の海のようになるという。そこに風が吹けば、この句のように風も紫に感じられることだろう。ラベンダーの香に包まれた美しい一句。

貰ひたる海胆惜しげなく盛りつけて 鈴木 藤子

海鮮の大皿に海胆を添える。買えば高価な生海胆だが

これは戴き物、大奮発して盛り付ける。その量たるや「惜しげなく盛りつけ」の如し。食卓の華として光り輝く。誰が最初に箸を付けるのか、想像するのも嬉しい。

寝つかれず母の浴衣を纏ひける 高橋満利子

初めから御母堂の浴衣を纏つたのではなく、一旦床に入ったものの妙に目が冴え、熱帯夜ということもあって寝つかれずにいた時にはたとその浴衣を箆筋から出したのである。纏つた感触の心地良き。作者はそのあと安らぎを覚えて眠りについたことだろう。母恋いの句。

絵手紙のひまはりの種零れさう 高橋美智子

ひまわり畑の向日葵ではなく、貰つた絵手紙に描かれている向日葵の花とその種。その種が零れそうだとこの句はいう。大きく立派な向日葵がこうべを垂れ、なにか立体映画のように絵手紙の葉書から作者の眼前に飛び出している。たくさんの種も零れんばかり、思わず手の平を差し出してしまふ。一種の幻想だが、実感がある。

花びらのほどけるやうに昼寝覚 竹森 美喜

どのようにしたら花びらの解けるように目覚められるのか。ぼく自身には想像もつかないほどの美しい場面である。掲出句は赤ん坊の昼寝覚とも思えるが、そうでは

あるまい。日頃の疲れが短時間の昼寝で解消され、生き返ったように目覚めたときの作者の心持に違いない。「花びらのほどけるやうに」心も解けたのだ。美しい。

冷蔵庫に入らぬ 大き西瓜買ふ 田中 京

こんな大きな西瓜を買ってきてどうするんだ？と作者も思ったことだろう。半分に切っても大きく分けても入らない。氷二貫目を入れて使った昔の冷蔵庫なら別だが今のように幾段もある電気冷蔵庫では無理である。解かつてはいたけれどこの大きな西瓜に惚れてしまった作者。でも上手く捌いたに違いない。

交換す 一滴の血と 蝨の毒 寺田 幸子

怖い句である。並んだ二つのベッドで血の交換をしている映画の一シーンを想像するが、そうではなく、蝨が作者の血を吸い、作者がそれと引き換えに蝨の毒を注入された。交換といっても平等ではないというところに、この句の怖さがある。こんな句を作った作者も怖い。

子の一人 電を冷蔵せしといふ 長井 敦子

天候の異変でこの夏も大きな電が降った。珍しいものを手にしたこの子は、溶かしてはいけなそうと思いをそれを冷蔵庫に入れた。それを仄聞いた作者が作品化した。

「冷蔵せしといふ」という飄々とした物言いがいい。

触れし手の涼しかりけり 青き頃 中嶋きよし

為すことが恥ずかしいことばかりだったあの若き日。その時分に触れた手を作者は忘れられない。何か涼しい感じがした。振り返りつつ初心に戻り、今を生きる。

セルロイドケースに二つ 蟬の殻 中代 曜子

蟬の殻を保管するための透明ケース。大人が入れたとは思えない、子どもが入れたのだろうか。蟬の殻、空蟬。透明感があり親しみがあつて、何よりも命というものを感じさせる小さな空蟬。透明なセルロイドケースからもそれが伝わる。

天牛も 歩く 横断歩道かな 中村 敬子

天牛は髪切虫。長い触覚を持ち、その鋭い歯は髪の毛を噛み切るほど。作者は横断歩道を渡っている時に偶然、この天牛を見つけた。天を飛ぶだけでなく道も歩くのだ、それも横断歩道を律儀に渡っている。どうか自動車に轢かれないようにと、心優しい作者は思ったことだろう。

恋よりも採れたて 野菜避暑の旅 中村 東子

避暑の旅ぐらいは「恋」から離れた。新鮮な空気、

新鮮な採れたての野菜を使った食事、夜空に輝く星々……。他に何が必要なのか。煩わしいことから逃れるため避暑に来たのだ。避暑に限らず旅は心身の疲れの回復に必要なツールなのでしょう。

盆棚や精一杯の歓迎会 中村 幹子

言われてみれば、お盆は御魂を迎える歓迎会。盆棚を作り、お供えを作り、瓜の馬や茄子の牛を乗せる。家族揃つての墓参。麦藁や藁、樺の皮を焚いてお迎えし、お送りする。その間、親類縁者が立ち寄るし坊さんも経を上げに来る。皆で「精一杯の歓迎会」を催しているのである。コロナ感染下でその民間行事も儘ならないが精一杯ご先祖様をお迎えしたいと、作者は思うのである。

千曲川に鮎釣る父や絵となりて 野沢 慶子

鮎を釣る、それも千曲川で釣る。ご尊父のかつてのその凛々しい姿が、作者の脳裏に今でも焼き付いている。それは一幅の絵のようだ。かの日かの時の記憶の欠片が絵として作者の眼前に掛かっている。父恋いの一句。

メロン食ふ遠き戦さに目をつぶり 橋本 恭子

争いごとの絶えない人類。昔も今も世界のどこかで戦争が行われている。動物の骨を振り上げて殺し合った時

代から、核を用いて大量殺戮を繰り返す時代へと。人類は確実に終末を迎えようとしている。そんな時に自分はメロンを食べている。メロンの俳句を作っている。そのようなことでいいのだろうか。と心の底で思う。「遠き戦さに目をつむり」に作者の良心を感じる。

保育園は寢息に満ちて時計草 長谷川菊男

保育園の一斉の昼寝タイム。外では時計草がいくつも咲いて時を刻んでいる。寝静まるうちに、可愛い寢息がどこからともなく聞こえ、今や保育園は寢息に包まれている。このような情景に安息を覚えた作者がこの句の中に居る。「時計草」が思いのほか効果を上げていよう。

五月雨を傘にはづませ神楽坂 浜田 優子

神楽坂はぼくには無縁の土地であるが、それでも数度訪ねたことがある。何か期待できる未知の領域とでも言おうか、路地の奥まったところに古風な料亭がありその入口には福が来るように「笑門」の札が下がっている。作者もまた何かを期待しながら五月雨をつけて神楽坂に。「傘にはづませ」から心のウキウキ感が見える。

仏壇の遺影目を剥くメロンかな 原田ミチ子

面白い句。メロンには無縁で亡くなったご親族が仏壇

に供えられたメロンに驚き目を剥いたという内容。作者がメロンをこれ見よがしに食べているわけではないので、このメロンにやましきはない。「目を剥く」の措辞から、このメロンが新宿の高野とか銀座の千疋屋で商っている箱入りの高級メロンのようにも見えてくる。

白桔梗退路はなしと思ふべし 春田 千歳

退路を断たれるという言葉もある通り、退路はこれ以上退けない最後の逃げ道。この句では、絶体絶命の身であるけれども決死の覚悟で全力を尽くし立ち向かおうという意味合いで用いられている。白桔梗の澄み切った純白。野辺に咲く凜とした風姿。作者が「思ふべし」と強く言い切っただけのことはある花は、もはや作者の化身。今後の進路に注目したい。

来し方や太田胃散と冷さうめん 平野 豊雄

太田胃散の効能書には「飲みすぎ、胸やけ、胃部不快感、胃弱」などと書かれている。作者がそのどれに該当するかは知らないが、作者の半生は太田胃散の世話になっていたかのようである。一方の冷素麺も、胃への負担が少ないので体にいい。「来し方」の句は普通自分のこれまでの生き様とか感慨を述べるのが常套だがこの句はそれを避け、太田胃散と冷素麺で人生を表した。

滝裏に居りて現世をはるかにす 福井 芳野

裏見の滝。東京では椿山荘の滝が有名だ。滝の裏に回り、滝を通して向うの世界を窺うことができる。勿論、滝の流れの神々しさも感じられ清涼この上ない。掲出の句の「現世をはるかにす」も誠にその通りで、もはや雲の上の人となつて下界を眺めている感覚に陥るのである。瞬時に過ぎぬが「現世をはるかに」するのは嬉しい。

河童忌やマスクに鼻の痒きこと 本多 遊子

芥川龍之介の小説『鼻』や死後作られた『澄江堂句集』（自選77句）に収載の句（水洩や鼻の先だけ暮れ残る）。掲出句は当然のことながらこれらの「鼻」を踏まえて作られている。「マスクに鼻の痒きこと」は作者の実感だろう。コロナウイルス蔓延下、三年近くマスクをし続けていれば鼻も痒くなる筈。龍之介を偲びつつ、龍之介所縁の鼻を自分に引きつけて詠み、成功した。

くさまくら銀河の吐息いよ濃く 松本 余一

地球から見る天の川銀河には二千〜四千億の恒星が含まれるという。太陽系もその銀河に在り、我々は銀河の中から銀河を仰ぎ星々の美しさに目を眩る。この句の作者も旅に寝て銀河を仰ぐ。「銀河の吐息」がいい。それは星の輝き。パルスの脈動の如く、いよいよ濃く吐息する。

黄苧蒲の花弁さながら茶巾鯨 水谷 光子

黄苧蒲の花弁は茶巾鯨に似ているなあという他愛もない句だが、彩りが綺麗。茶巾鯨には、混ぜご飯を薄焼玉子で全面的に包むものと、包んだ薄焼玉子の花びら状に大きく手前に広げたものがある。後者は「京樽」の茶巾鯨。黄色の薄焼玉子の上に小さな赤い海老が乗る。美味しそうな黄苧蒲である。視点がユニーク。

右肩の入りきれない片かげり 持田きよえ

猛暑につき道の片蔭を選び歩こうとするのだが、まだ片蔭が十分に広がらず作者は極めて細い所を窮屈そうに通る。右肩だけがどうしても片蔭からはみ出し、それがさつきから気になる。別に怒り肩でもないのに。などと思う間もなく片蔭が終る。肩と片蔭がコラボした、これも個性的な一句で「入りきれない」が秀抜。

決然と白き傘 ゆく大夏野 森尻 禮子

高屋窓秋の代表作として知られる昭和七年発表の〈頭の中で白い夏野となつてゐる〉を彷彿させる印象深い句である。白色というのはぎりつとしていてまことに強い色だ。「決然」「白」「大夏野」の最強の言葉が並ぶことでこの傘の主人公の身の上が暗示される。草いきれの立つ大夏野。何を決心し何処へ行くのだろうか、作者は。

ポピーに風血廻しの皿まはるやう 山田 雅子

本当にぐるぐる回つたのだろう。そのポピーの回りやうが「皿廻しの皿」みたいだと。私事だが、結婚披露宴に呼ばれた時に新郎の祖父がチャイナ服を着、チャイナ帽を被り皿廻しの芸を披露してくださったことがある。幾つもの棒の上の皿が廻り拍手喝采であった。そのようなことを思い出せてくれた一句。ポピーの花も可愛い。

夾竹桃復員の伯父酒浸り 横須賀智子

日本が敗れて七十七年。以前、仕事で都内の開業医の先生を訪ねたときに、終戦直後の話になった。その年配の医師は復員兵に服毒自殺が多く度々胃を洗滌した旨を語ってくれた。敗戦後の男たちは、自殺しないまでも川で釣糸を一日中垂らしているなど無為に過ごす人もいたし、この句の伯父さんのように酒浸りになった人もいた。戦争が終つてからが本当の戦争だったのだろう。この句、夾竹桃がまことに毒々しく不気味である。

そよぎたき刻もあらうに水中花 東 祥子

水浸しにされ、水の中でしか生きられない花となつた水中花。もともと造花であるが、そうだとしても壺に活けられ風に戦いでもみたい。それが叶わぬ水中花を想い作者は「そよぎたき刻もあらうに」の心優しい句を得た。

二段づつ登る若者雲の峰 荒尾寿美江

元氣な若者。長い脚でさつと追い抜いて行く。駅の階段では確かに二段ずつ悠々と登っていく。それを下から羨望の目で見ると、その登った先にきつと雲の峰があるのだろうか。この句の巧さは「雲の峰」を下五に置き、若者たちがあたかも入道雲へと登っていくかのような景を演出していることにある。

暑さ倦き倦き液だれのソース瓶 伊澤やすゑ

連日の猛暑に辟易している様子が窺える。その心情を「液だれのソース瓶」という暑苦しい、目を背けたくなる具象物でねちっこく表現していて秀逸。読者へのサーピスだろうか、伊澤家の暑さが瞬間移動してきそう。

冷房か川風か夜はじゃんけんす 石垣喜代子

暑い一日が終り、ようやく夜の静寂が訪れる。昼間は冷房を適切に入れて暑さを凌いできたが、夜はどうするか。冷房を引き続き入れるか、それともずっと冷房を入れていると体によくないから窓を開けて川風を通そうか。夫婦間で話し合った結果、それをじゃんけんで決すことにした。極めて民主的である。普通はどちらか力の強い方の意見に従うところだが、仲良しのご家庭は違う。じゃんけんが羨ましい。

妹背負ひて見た紙芝居昭和の日 市村 啓子

紙芝居は当初、見料をとって見せていたが、昭和初期に取締りが厳しくなり、見料を取る代わりに絵を見せながら解説し飴を売るという方式に移行した。自転車に紙芝居と煎餅などの駄菓子積み町中を回ったが、作者も幼い頃には紙芝居を見ていたのだろう。この句、妹を背負って見たというのがいかにも昭和である。

恥部臀部洗ふ他人の手秋灯下 岩根 甲

退院後、家を離れて施設で療養されていると仄聞する。この一句はその療養先での赤裸々な景を冷めた目で詠んでいる。自分の肉体を介護や看護の人々の手に委ねざるを得なくても、人間の自尊心、羞恥心は消えることがない。秋灯の下というのが物悲しいけれど、岩根さんはすべてを悟っていて、句会でも確りした句を毎月送ってこられる。ご快復をお祈りします。

熱雷や激辛チキン齧らねば 牛込はる子

熱雷は、日射による地面の過熱によつて発生する積乱雲に伴う雷をいう。これに対抗するには、何といつても「激辛チキンを齧らねば」と作者は詠む。元々、辛い物が嫌いではないのだろう。激辛の唐辛子にはカプサイシンという辛味成分が入っていて、それは殺菌作用があり

唾液や胃液の分泌を促すというから、体にはいいらしい。適度に激辛チキンを食べて夏を乗り切って頂きたい。

父の日のポロシャツを今パジャマとす 内海 範子

父の日に父へ買ったポロシャツ。スポーティーなシャツだ。残されたそのポロシャツは捨てられることなく作者の手元にあつて、今では作者のパジャマ代りになっている。あつけらかんと「パジャマとす」と詠んでいるが、これは然りげ無い父恋いの句。

ブリリアント・カットの如く光る夏 大下 壽櫻

58 面体に仕上げたダイヤモンドのカット。見たこともないので「ブリリアント・カットの如く」の比喩の実感は湧かない。湧かないけれど、とても高価で輝かしい光を放っているということは理解できる。眩しいばかりの夏という季節を58面体の光で表して、見事。

籐寝椅子五体永らくなほざりに 太田 裕子

五体は全身を指し頭・両手・両足をいうが、身体の筋・脈・肉・骨・皮なども含む。この句では、忙しきやのつびきならぬことにかまけてきた自分の身体を詠む。疲れ切った五体を籐寝椅子で休ませた時に「永らくなほざりに」のフレーズが生まれたのだろう。籐寝椅子に納得。

梅雨晴や両手を掲げ気の満つる 小河原政子

梅雨が続いている合間の晴れ。五月晴ともいう。その束の間の晴れに思わず両手を挙げたのは、喜びの一つの発露。作者らしい所作だと思う。「気の満つる」の高揚感も若々しく、これからが楽しみ。

人肌の火照りの匂ふ海の家 金子かほる

泳げない身としては肌の「火照り」がとても羨ましく、妬ましい。火照ったことがないのだ。これは人間として致命傷。とは言え、海の家には毎年行くから、そこに集う人々のことは少しは理解できる。作者は遠泳もした湘南育ち。「火照りの匂ふ」若さをよく「存じである」。

変人と言はれ炎天日光浴 金子 学

「変人」ではなく「変人」と言われた由。病を得ているのに炎天下へ出掛けようとしたのだろう。「これから日光浴に行ってくる」とでも言ったのか。家に閉じ籠る暮しが続いていれば日が恋しい。炎天も日光浴なのだ。

大叔父の出前の鰻二段なり 金田 知子

来客用に鰻重をとつたら、何と豪華なのだろう、ご飯の下に鰻がまた乗っている。二倍である。大叔父の家の出来事だから、作者がこれを戴いたことになる。「二段な

り」の力強さ。素晴らしい親戚をお持ちでご同慶の至り。

大花火人の谷間に光り降る 金田 喜子

人混みが苦手なので花火大会には出掛けない。でも、掲出の句を読むと、打上げ花火の美しさに惹かれてしまふ。殊にこの句の「人の谷間に光り降る」。人混みと捉えないで「人の谷間」と描写する、その達観した思慮と言葉遣いに脱帽した。

ハンカチの跳ぬる子の腰庭遊び 菊地 孝枝

庭で遊んでいる幼子のハンカチの躍動に注目した作者。後ろのポケットにハンカチを入れているのだろう、元氣よく跳ね回るたびにそのハンカチが上下する。明るい色のハンカチを想像する。ハンカチをこのような角度から詠めたのがこの句の収穫。

ヘップバーン似の叔母鮎を頭から 北 好夫

『旅情』『アフリカの女王』『招かれざる客』のキャサリン・ヘップバーンと『ローマの休日』『麗しのサブリーナ』『暗くなるまで待つて』のオードリー・ヘップバーン。同じキャサリンでもこの句は勿論、オードリー。その若々しいオードリーに似た叔母さんが、何と鮎を頭から齧つたので作者は驚いた。「鮎を頭から」の措辞が鮮やか。

山風や麦の黒穂の薄煙 栗原 季星

「黒穂は黒穂病に罹つて黒くなった麦の穂」と広辞苑に書いてある。夏の季語である。山風に吹かれればその穂から薄煙が立つと、この句は語る。きちつとした定型に収められたこの句、黒穂のものの哀しさをよく切り取っている。

猛暑の日節電便座心地よし 小坏あゆみ

家庭でできる節電対策の対象の一つに温水洗浄（ウォッシュレット）便座がある。温水をオフにしたり、使わない時はコンセントをプラグから抜くと、削減効果は1%未満が見込まれるとか。小坏家でも夏はオフにする。節電の効果以上に、便座がひんやりとして「心地よし」。節電はお尻から、というCMが出来そうである。

眼病に長くつき合ふ罌粟の花 小泉まり子

眼の病は多岐にわたる。ぼくは白内障があり緑内障の治療も受けているが、それ以上に網膜剥離とか、もつと失明に至る深刻な病気もあるだろう。作者も長くこの眼病と付き合っている由。その煩わしき、闘病への思いが「罌粟の花」に集約したのでだろう。罌粟の仲間でも、阿片が採れる「渥美ケシ」などは栽培が禁じられている。〈罌粟咲けばまぬがれがたく病みにけり 松本たかし〉

かはほりの飛ぶ空がある故郷 幸喜美恵子

破調の句だが、「故郷」が印象深く残り、いい効果を上げている。わが国分寺でも夕暮れ時に蝙蝠の飛ぶ様をみることもあるが、故郷には叶わない。掲出句の故郷は山河の上に大きく広がる空を湛えているのだらう。その空の深さ、豊かさが見えて来る。

平泳ぎ兄の背に乗り竜宮へ 小濱けえ子

御伽噺のようだ。水がまだ怖かった幼い頃、兄に背負われて水に入った。そこから竜宮城までの二人は、まるで『千と千尋』。想像力を掻きたてるロマンある一句。

硯洗ふ父の磨りぐせねむころに 小林ゆきお

習字の上達を願い、七夕の前日に硯を洗う。この句の硯は亡き父の遺したもの。墨を磨るのにも個々の癖があるように、作者は硯を洗うたびに父の「磨りぐせ」を確かめ、そこを懇ろに洗うのである。愛情に溢れた句だ。

胸にとび来貴石となりし子蠅螂 小林 玲

蠅螂の小さな小さな子。胸に飛んで来たが青々としていて可愛い。その可愛さを作者は「貴石」と讃える。貴石はダイヤモンド、エメラルドなどの高価な宝石。子蠅螂はそれと同等の魅力を秘め、作者の胸を飾る。



創立60周年記念事業

「俳人協会所蔵名品展」

(近世俳諧の潮流・歴代会長八名の足跡)

★期 間…令和4年11月1日(火)～11月30日(水)

(10時～16時・第2金曜日は19時半まで 入場無料)

(休館は毎週木曜日と11月16日創立60周年記念式典)

★場 所…俳句文学館(三階展示室・三階会議室)

★展示内容…俳人協会所蔵の江戸俳諧諸家たちの軸物、短冊、色紙等。

芭蕉、其角、文草、蕪村、一茶 他



(蕪村「踏破蒼苔」自画賛 軸装)

主催 公益社団法人 俳人協会

〒169・8521 東京都新宿区百人町3丁目28番10号

TEL.03・3367・6621(代)

※詳しくはホームページを参照ください。